

月例研究会 (2019年11月20日)

キリスト教における「家族主義」 への一考察

— クィア神学の観点から

堀江 有里

「キリスト教は同性愛を受け入れない」と表現されるように、同性愛者差別を牽引してきた宗教のひとつである。その傾向はとくに同性婚の制度的容認に対し、キリスト教の観点から反対論が起こっている点にも顕著である。〈父—母—子〉のユニットを「正しい家族」と主張する「家族の価値」尊重派の根拠はどこにあるのか。その無根拠性を検討してみたい。

とくに議論の蓄積が多く存在するアメリカ合衆国において「家族の価値」尊重派の動きが政治分野に影響力を拡大してきたのは1990年代である。かれらはブッシュ Jr. 政権(2003年)を支える「宗教右派」として台頭し、異性愛主義的な宗教言説が前景化することとなった。その動員として、比較的リベラルな主流教会の衰退が指摘されることもあるが[栗林輝夫]、ポスト冷戦時代における自らのアイデンティティ確認のためにあらたな「敵」の措定として同性愛者や女性たち、移民などへの排除思想がせり出してきたという指摘もある[藤井創]。前者では主流教会での同性愛嫌悪の説明がつかない。後者は他者排除の論理形成として説得力をもつが、個別課題の掘り下げとどのような共通点が主張されてきたかを詳細に検討する必要がある。

同性愛嫌悪が政治分野で大きな影響を拡大してきた時期と並行して、キリスト教神学では「クィア神学(queer theology)」の研究が蓄積されてきた。おもに男性同性愛者への侮蔑語として使用されてきた「クィア」は、学問やエイズ・アクティビズムなど社会運動において意味を横奪し、異性愛主義など性規範を問うツールとして鍛え直されてきた。聖書を読み直す作

業も、クィア神学では重要な営為である。

聖書は、ユダヤ教の文書(旧約聖書)とキリスト教独自の文書(新約聖書)から構成されるが、これらの執筆および編纂過程にはそれぞれ文脈が存在する。いくつか例示する。

①「離婚の禁止」と解釈されてきたテキスト(マルコ福音書10:2~9)

ここではイエスが「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」という文言が登場する。ここではイエスの時代に使用されていた律法(申命記24:1~4)をおさえておく必要がある。

妻が夫に法的・経済的・性的に従属し、夫は複数の妻を所有していた時代であり、夫のみに認められていた特権の否定とも読める文言である。

②血縁家族の否定(マルコ福音書3:20~35)

1世紀の地中海文化では血縁関係と性の区分に基づく「集団主義」が重視されていた。しかし聖書にはイエスがそのような価値観への攻撃を繰り返す記述がある[D.クロッサン]。自身のもとに訪れた血縁者たちを前に「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と答え、周囲の人びとを「わたしの兄弟、姉妹、母」として名指す光景である。

これらは一例にすぎないが、少なくとも聖書には、異性愛の結合と生物学的なつながりのある子を「正しい家族」として措定し、終身単婚制を重要視する根拠は見いだせない。もちろん、キリスト教の教義には歴史のなかで解釈を加えられ、〈伝統〉として継承されてきた経緯がある。「家族の価値」尊重派の無根拠性をあきらかにすると同時に、一般的なキリスト教という宗教運動、あるいはその宗教運動を継承するメディアとしての教会という組織があゆんできた歴史についても批判的に検証していく必要がある。

(ほりえ・ゆり 法政大学大原社会問題研究所客員研究員)